

# 反復聴取がメロディのまとまり感に及ぼす影響(2)

生駒 忍

(筑波大学人間総合科学研究科)

キーワード: 単純接触効果 潜在記憶 調性

The effect of repeated exposure on subjective coherence for novel melody (II)

Shinobu IKOMA

(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)

Key words: mere exposure effect, implicit memory, tonality

## 目的

生駒(2006)は、単純接触効果の認知心理学的な研究知見(生駒, 2005a 参照)を背景に、音楽に対する調性感の成立に聴取経験の効果に寄与している可能性を指摘した。そして、調性感の測度としてメロディの「まとまり」感を取り上げ、以前に聴取しているメロディにはより高いまとまり感が得られることを実験的に示した。

ただし、そこで得られたのは接触時と全く同一の刺激メロディに対しての効果であった。調性感の学習という点では、それだけでなくそれがどの程度まで般化するかも興味深いと考えられるが、この点については解明されていない。

そこで本研究では、異音高への般化を扱った生駒(2004)の手続きを用いて、反復聴取がメロディのまとまり感に及ぼす影響について検討する。これによって、反復聴取がまとまり感に及ぼす効果について、現象の再現性や頑健性を確認すると共に、般化の有無についての知見を得ることができる。音高の操作は、倍音成分の重複や調の近親性の影響を除けるよう、元のものから 3 全音 (1/2 オクターブ) 分を動かす形とする。また、この操作は再認課題で般化を認めなかった生駒(2005b)でも用いられていることから、般化が得られればまとまり感の向上が再認のような顕在記憶判断とは独立した過程に基づいていることが示され、単純接触効果の認知心理学的な理論を適用した生駒(2006)の議論を支持するものとなる。

## 方法

**実験参加者** 大学生・大学院生 11 名 (男性 6 名・女性 5 名) が参加した。

**実験計画** 2 (学習段階での聴取経験: あり-なし) × 2 (テスト段階での提示音域: 同音域-3 全音移高) の 2 要因被験者内計画。

**刺激** 12 半音から 6 音をランダムに選択し並べたもの、60 種。音価は全て等しく 1 刺激あたりの長さは 3s、音色は MIDI 音源のピアノの音色を用いた。テスト段階の般化条件では 3 全音分低く移高して用いた。

**手続き** 個別実験で行われた。実験は学習段階とテスト段階とからなり、間に約 3 分の休憩を挟んだ。参加者には、両段階は実験のそれぞれ前半と後半とであると教示し、記憶実験であることは伝えずに実施した。

[学習] 40 種の刺激メロディを 7s おきに提示し、それぞれに対して感じられるまとまり感を 1~7 の 7 段階で評定させた。[テスト] 参加者が行う課題は学習段階と同様。提示される計 40 メロディのうち、学習段階で提示する場合と同じ音域で提示されるものが 20、3 全音分下げて提示されるものが 20 であり、それぞれのうち 10 ずつが学習段階で既に提示されたメロディによっており、残り 10 ずつは未提示のものであった。刺激は参加者間でカウンターバランスが取られた。

テスト段階の後、記憶実験であることに気づいていなかったかどうかの確認、およびデブリーフィングを行った。

## 結果

テスト段階における各条件のまとまり感平均評定値は Fig. 1 のようになった。

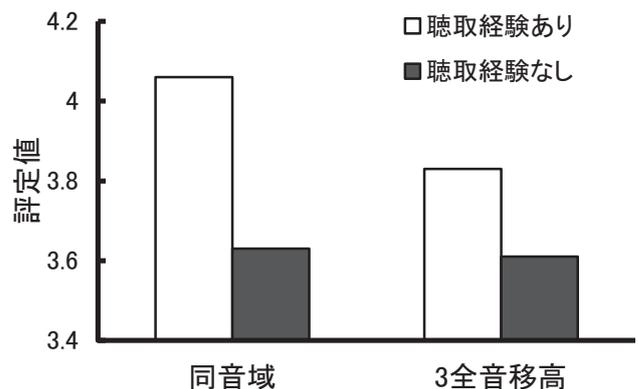


Figure 1 テスト段階におけるまとまり感評定値

聴取経験 × 提示音域の 2 要因分散分析を行ったところ、聴取経験の主効果が有意であり ( $F(1, 10) = 7.78, p < .05$ )、反復聴取によるまとまり感の向上が示された。音域操作の主効果は有意でなかった ( $F(1, 10) = .62$ )。交互作用は有意でなく ( $F(1, 10) = .47$ )、反復聴取の効果は音域操作に関わらず同様に得られることが示された。

## 考察

本研究では、反復聴取がメロディのまとまり感に及ぼす影響について、元のメロディを移高したものへの般化が起こるどうか検討した。実験の結果は、般化が生起すること、その効果は移高しない場合とほぼ同等であることを明らかにした。生駒(2004, 2005b)の知見と対応させると、まとまり感の向上は潜在記憶に基づいているといえ、一般的な単純接触効果と同様のメカニズムで理解できることが示唆された。また、同一の刺激の聴取経験はない場合でも、一定の特徴が共通である先行経験があれば影響が得られると考え、調性の学習という面でも興味深い。本研究では、相対的な音高パターンがその特徴に当たるが、今後は旋法やリズムパターンなどの操作を加えて、調性感がどのような先行経験に支えられるのかを明らかにしていくことが求められよう。

## 引用文献

- 生駒 忍 (2004). メロディの潜在記憶における非オクターブ般化の検討 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 779.  
 生駒 忍 (2005a). 潜在記憶現象としての単純接触効果 認知心理学研究, 3, 113-131.  
 生駒 忍 (2005b). メロディの偶発学習における非オクターブ般化の検討 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 865.  
 生駒 忍 (2006). 反復聴取がメロディのまとまり感に及ぼす影響 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 662.